続・中世の尼寺ノート（その1）

牛山佳幸

はじめに

本稿は『日本の女性と仏教・会報』第三号（研究会・日本の女性と仏教　編集発行、一九八六年）に寄稿した「中世の尼寺ノート」の続編にあたり、前稿で立項を見合わせておいた尼寺やその後に気づいた尼寺を取り上げて紹介し、中世尼寺全体の性格や歴史的意義を解明するための基礎資料にしようとするものである。もっとも、この間に同研究会によって四冊シリーズの『女性と仏教』の刊行が企画され、その第一巻『尼と尼寺』（一九八九年、平凡社刊）に私も「中世の尼寺と尼」というテーマで執筆する機会に恵まれたので、前稿で見落としたものを含めて、その時点で確認しえた中世尼寺の一覧表を作成して掲げ、それをもとに中世における尼寺の存在形態や消長を概観することにつとめた。ところが、本文の中では個々の尼寺について詳しく言及することは原則として不可能であったし、何よりも、その一覧表に早くも見落としのあることが判明したため、改めて中世尼寺の個別検討をする必要性を痛感したのである。このように、本稿はあくまでも「中世の尼寺ノート」の補稿に過ぎないものであり、この点をあらかじめお断りしておきたいと思う。

前稿と本稿とでは、若干執筆の体裁を変えてある。まず、第一部と第二部に分け、第一部にはたとえ中世の一時期、短期間であっても、ともかく尼寺として存在したことが確実なものを収めることにした。これに対して、第二部では尼寺か僧寺か判別しがたいもの、あるいは創建が中世に遡りうるかどうか史料的に問題があるもの、といったいわば存疑とすべきものを一括して扱ってある。このほか、叙述を五畿七道順ではなく五十音順にしたこと、そして可能な限り注を付すことにしたことなどが前稿と異なる点である。本稿においても恐らく見落としが多いことが予想され、こうした落ち穂拾い的作業は今後もしばらく続ける覚悟でいるが、大方の御協力を得て、いずれは中世の全尼寺を集大成したものを完成させたいと念じている次第である。

なお、本稿は一九八九年度庭野平和財団研究助成金（研究題目「日本における尼寺と尼の史的変遷」89―R―039）による研究成果の一部であることを付記しておく。

第一部

阿弥陀寺（長門）

現在、山口県下関市阿弥陀寺町に鎮座する赤間神宮の前身で、安徳天皇の御影堂を中心に発展した寺である。近世の地誌[1]には、宇佐

八幡を男山に勧請した行教が貞観元年（八五九）に創建したのが当寺の始まりと記すが、伝承の域を出るものではなく、史上にはっきりと姿を現わすのは、やはり寿永四年（一一八五）三月の壇之浦合戦以後とみてよい。すなわち、この時入水した安徳天皇が赤間関の地に葬られ、ついで鎌倉幕府成立後の建久二年（一一九一）にその追福のために一堂が建立されたのである。この経過は『玉葉』同年閏十二月十四日条、二十二日条、二十八日条、二十九日条によって具体的に知られるが、それによれば、保元の乱に敗れて讃岐の配所で薨じた、崇徳院の怨霊鎮撫のための堂宇建立と同時に進められた事業であった。両所とも「依レ不レ擬二神社一、無二奉幣之沙汰一也」とあるように、最初から仏堂として企画され、閏十二月二十九日に、最終的に建立を認可した旨の宣旨が讃岐・長門両国に下されたことがわかる。

さて、寺伝（『赤間宮由来記』『赤間宮略誌』[2]）によると、この御影堂に初めから近侍したのは、建礼門院乳母の女少将局（命阿尼）であったとされるが、この点については同時代の確かな文献で裏付けられるわけではない。しかし、建徳二年（一三七一）九州探題として下向の途次、赤間関を訪れた今川了後は、その記行文『道ゆきぶり』[3]に

…其東に寺あり、阿弥陀だうといふ、安徳天皇このうらにてかくれさせ給て後に、知盛の卿女の少将のあまとかやいひける人、こゝにのこりとゞまりて、平家の跡問けるを、のちにかの御菩提所になされて、安徳天皇の御尊影おはします……

と記すので、古くからそうした伝承のあったことが知られ、当初の住持が尼であったことは一応認めてよいだろう。『下関市史原始―中世』などは、寺伝に基づいて命阿尼のあと、「二世照阿尼は少将局の女、三世生阿尼・四世慈阿尼と相続し、五世に至って長全法師が寺務を執り、尼僧相続がやんで四宗兼学に復し…」などとするが、この辺のことになると根拠がはっきりせず、尼寺としていつまで維持されたかは不明である。当寺に関しては鎌倉初期以来の中世文書多数が赤間宮文書として伝来し、とくに建仁三年（一二〇三）二月日付のものを初めとする、寺領関係の長門国司庁宣三通[4]（いずれも留守所宛のもの）が含まれているが、当寺が尼寺であったかどうかをうかがわせる文言は見えない。ちなみに、建仁三年の庁宣には「御堂鎮守社」とあったのに対して、天福元年（一二三三）のそれに初めて阿弥陀寺の寺号が現われることは、この三十年間に規模の大きい寺院に発展したことを示している。

宗派的には、文明十一年（一四七九）三月十二日後土御門天皇綸旨に[5]「長門国阿弥陀寺多年帰二命西山門流一、宜レ安二四宗兼行之祖風一……」とあるように、中世後期頃には浄土宗西山義に属していたことが知られ、赤間関周辺に群居していた念仏聖たちの中心的寺院でもあったらしい。近世初期までに真言宗に改宗して明治を迎えたが、明治三年（一八七〇）新政府の指示で廃寺となり、御影堂は天皇社となった。さらに、明治八年（一八七五）社号を赤間宮と改め、明治十五年（一八八二）には官幣大社昇格に伴なって、さらに赤間神宮と改称している。[6]

安徳院（播磨）

宮内庁書陵部所蔵谷森健男旧蔵本（以下、本稿では谷零本と略す）の『尊卑分脈』[7]によると、洞院公賢（一二九一～一三六〇）の子女の一人に「女子（比丘尼理明 播州安徳院 浄土天台教僧）」と見える。「浄土天台教僧」とあるのがやや気になるが、一応安徳院は比丘尼理明の入寺した尼寺と考えてよいだろう。所在地、沿革については不詳。

安養院（播磨）

谷零本『尊卑分脈』によると、洞院公賢の子女の一人に「女子（比丘尼理融、播州安養院）」とある。前項の理明の妹にあたる女性である。安養院と同様に、他に関係史料は見当らず、沿革不明の尼寺である。

伊勢寺（播磨）

貞和四年（一三四八）、播磨国峯相山鶏足寺に参詣した折、老僧と深更まで語り合った時の話をまとめたものとされる『峯相記』[8]の中に、「文永ノ比當國二五ヶ所ノ奇麗ノ念佛堂ヲ造ル事有キ、檀越ハ皆當國富貴輩也」として五ヶ寺が挙げられているが、その一つに「筑紫尼公伊勢寺河内ニ造ル」と見える。尼公の創建とあるから尼寺の可能性が高いが、居住したとはないから断定もできない。筑紫尼公なる女性の素性や伊勢寺についても、他に所見がなく不明。これらの寺は念仏系らしいが、のちにはすたれて禅寺や律に代ったとある。ただ、伊勢寺のみは「當山へ遷造レリ」と記すから、鶏足寺に合併されたのであろうか。

なお、河内（こうち）の地名は河西市（古代の賀茂郡川内郷に由来するもの）、宍粟郡千種町、揖保郡揖保川町、小野町（旧加東郡）など、旧播磨国内でもいくつか現存しているため[9]、当寺の所在地は特定できない。

一乗院（山城）

一条兼良の息大乗院尋尊が修訂書写したことが確実視されている『摂家系図』[10]は、兼良の子女二十六人をすべて列挙している点で貴重なものだが、これによると、長女（第二子で兄に教房がいる）尊秀尼のところに「招題寺　八幡一乗院」と註記されており、当時彼女が住持を勤めていた尼寺であったことがわかる。「八幡」は山城男山の石清水八幡宮寺とみてよく、その子院として存在したものであろう。ただし、石清水関係の記録では今のところ、この寺に関する記事を確認していない。「招題寺」とあるのは、唐招題寺流律宗に属していたことを示している。

栄寿院（山城か）

『看聞御記』[11]によると、応永三十一年（一四二四）五月十三日に死去した入江殿（三時知恩寺）方丈は、栄寿院と長照院の院主を歴任していたことがわかるが、この女性は崇光天皇の皇女（母は治部卿局）で、伏見宮栄仁親王の異母妹であった。栄寿院の所在地は不明。この項、横井清『看聞御記―「王者」と「衆庶」のはざまにて―』（一九七九年）による。

円興寺（山城か）

『尊卑分脈』によると、広橋仲光の女子の一人に「円興寺長老浄玉」なる者が見えるから[12]、円興寺が尼寺であったことがわかる。同系図によれば、彼女の姉は恵聖院開山尼となった素玉光庵であり、叔母に大慈院開基の崇賢門院仲子（後光厳天皇皇后）がいた。なお、西口順子氏もすでに指摘されている[13]ように、戦国期の一向宗の僧、顕得寺実悟の編にかかる『日野一流系図』[14]には、本願寺四世存覚の女子光女について、「建武二年二月時正発心出家十七歳、為融観芯葛尼弟子、法名永禅、西大寺長老恵善上人受戒弟子、顕意上人受法灌頂弟子、円興寺長老」と記されているので、当寺は西大寺流律宗に属していたとみてよいだろう。

応聖寺（山城）

師蛮の『延宝伝灯録』巻第二十九[15]の「江州應聖寺尼宗久禅師」の項によると、宗久は内藤氏の出身で、一度近江塩津の熊谷氏に嫁したことがあるが、世を厭い深く仏道に志すところがあって、髪をおろした。ついで洛東に居を移して、ある大徳に参禅したのち、「城北大原」の地に応聖寺を建立したと見える。この記事によって、当寺は山城大原にあった尼寺と考えてよいが、典拠が不明で、他に関連する史料も見当らず、これ以上のことは不明である。とくに、宗久の生没年や師事した大徳の名が記されていないので、時代もはっきりしないのだが、前後の項目で取り挙げられているのがいずれも中世の僧尼である点からして、一応中世の尼寺とみておく。宗派は臨済禅であろう。

海島寺〈開桃寺〉（甲斐）

文化十一年（一八一四）松平定能の自序のある『甲斐国志』[16]によると、海島寺は山梨郡栗原村にあった曹洞宗の尼寺で、山号は龍厳山、大泉寺（山梨郡古府中）の末寺で、朱印地七石五斗余とある。また、「寺記」を引いて、開基は「武田信虎ノ伯母寶山玉長老」、二世は「天徳祖瑞長老、亦信玄之伯母也」、本寺はなく、尼の住持すること十一世に及んだが、その後堂宇が悉く頽廃したと記す。ついで、宝永四年（一七〇七）七月四日、新たに御朱印を賜り（この際の綱吉朱印状写は、後掲の『甲斐国社記・寺記』に所収）、この時に尼寺を改めて僧寺となしたが、その事情は松平美濃守の老臣八人連名の添状（この文書は現存しないらしい）に委く見えるとしている。『甲斐国志』の右の記事には脱漏があるらしく、意味不明のところもあるが、当寺がはじめ尼寺であったことは事実とみてよいだろう。

ところで、慶応四年（一八六八）に寺社御役所に提出した書上を集成した『甲斐国社記・寺記』[17]には、海島寺のところに、戦国期から享保三年（一七一八）に至る十一通の文書[18]が掲げられている。このうち最も年紀の古い永禄三年（一五六〇）九月十日武田信玄禁制写、およびそれに次ぐ天正二年（一五七四）の二通の文書の宛所は、いずれも「開桃寺」とあるので、当初はこのように表記したことがわかる。なお、同書は開山を「武田信玄伯父……大泉寺二代吸江和尚」と記し、かつて尼寺であった点については全く触れていない。

寛元寺比丘尼寺（筑後）

寛元寺文書の徳治参年（一三〇八）二月十日西牟田浄西・藤原有家連署寄進状[19]に「奉ㇾ寄ニ進　寛元寺比丘尼寺田地参町屋敷貳箇所事」とある。「寛元寺・比丘尼寺」とするか、「寛元寺ノ比丘尼寺」と読むかで若干意味が変わってくるが、いずれにしても寛元寺の境内、もしくは同寺に隣接して存在した尼寺とみてよいだろう。寛元寺は臨済禅の寺で、当国では著名な古刹の一つである。ちなみに、このあたりは中世の三潴荘に含まれるが、同荘内にはかつて宝琳寺・摂取院という二つの北京律に属する尼寺もあった。

玉田寺〈玉伝寺〉（甲斐）

玉田寺は山梨郡小瀬村（現甲府市）にあった寺で、時宗一蓮寺末、山号は如金山、『甲斐国社記・寺記』によると、開基の「玉伝寺殿長老生弐祐信大法尼」は、武田信玄の五女で穴山某の室となったが、夫が早世したため天正元年（一五七三）落髪して一寺を建立し、武田家より仏供料として四十一石四斗余を寄進された。しかし、生弐が慶長十三年（一六〇八）に入寂してからは、寺務相続が困難となり、一蓮寺の隠居寺として存続を許されたとある。玉田寺の初見史料である一蓮寺文書[20]の天正十年（一五八二）徳川家康印判状写は、「甲州一蓮寺小庫裏の寺領並びに名田屋敷等を安堵したものだが、ここで当寺が「小庫裏」と呼ばれているのは、一蓮寺の隠居所の意味と解釈してよいだろう。従って、この時点では明らかに僧寺となっていたわけだが、大森快庵の『甲斐叢記』[21]に引く「武田信玄略系」には信玄の末娘に「玉田院生一尼」なる女性が見えることや、松平定能の『甲斐国志』にも「當寺古昔ハ尼寺ナリ」と明記されることなどから、草創当初尼寺であったことは確実と思われる。開基の生弐祐信尼は武蔵で没したらしいが、この事情については武蔵玉田寺の項を参照。

玉田寺（武蔵）

文化十一年（一八一四）松平定能の自序のある『甲斐国志』の山梨郡小瀬村玉伝寺（ママ）の項[22]には、「古記」を引いて「生弐尼ハ武田勝頼ノ妹ナリ、武州横山ニテ卒ス」と記されている。天正十年（一五八二）の武田氏滅亡によって、多くの一族・遺臣・残党が甲武国境を越えて八王子周辺に逃避したが、甲斐玉田寺の開基で同寺長老であった生弐祐信尼もその一人であり、武蔵国で没したのも右のような事情によるものであった。ところで、彼女の居住した寺庵だが、『新編武蔵風土記稿』[23]によると、多磨郡元横山村の項に「舊跡　玉田寺迹」とあるのが注目される。同書の割注には「當寺は玉田禅尼の開基と云、この尼は甲州仁科五郎信盛の息女にて、信松院禅尼と同じく此地に来り、佛道に帰依して一寺を造立し、ここに住持し、慶長十三戊申年七月廿九日當寺にて寂せり、年二十九と云々」とあるが、また「按るにこの禅尼実に誰人の女なることを詳にせず、或は信玄の姉と云、又勝頼の妹とも云て一定しがたし、ことに法蓮寺（郡中川口村）の位牌に七十五歳にて寂すと書せりさあるとき（ママ）は年代齟齬し、いよいよ疑べし」とも記されるように、ここには明らかに混同がある。甲斐にあった寺と同じ寺号を称している点からすれば、武蔵玉田寺の開基も生弐祐信尼とすべきであり、姪にあたる仁科信盛女（小督）と同居していたとみれば矛盾はないだろう[24]。右の記事に

は当寺が元禄の頃に廃寺になったと記すが、『新編武蔵風土記稿』の瀧山大善寺の項[25]を見ると、同寺境内に玉田寺旧跡から改葬された「仁科信盛女小督墓」があり、その注記として慶長十三年（一六〇八）に小督が寂した時、乗譽琳山和尚を導師とし、「玉田院光譽容室貞舜尼」が葬儀を勤めたとあるので、この当時までは存在していたことが知られよう。

桂林寺（山城）

『大乗院寺社雑事記』寛正六年（一四六五）七月三日条[26]に「予妹七歳花山院之内桂林寺ニ被ニ在付ニ云々、比丘尼所也」とある。尋尊の妹（つまり一条兼良の女）が七才で花山院内にあった尼寺桂林寺に入室したことが知られるが、この妹とは、一条家の系図として最も正確で詳しい『摂家系図』によると、兼良の十女で桂林寺殿と呼ばれた宗方尼（母源康俊女）のことであった。花山院とは、清和天皇皇子貞保親王の邸宅に由来し、藤原忠平に譲られて以来藤原氏に伝領されたが、時々の天皇の居所ともなった。近衛の南、東洞院の東に位置し、東一条第ともいう。

なお、『本朝皇胤紹運録』[27]によると、後二条天皇の孫康仁親王（文和四年＝一三五五薨）の子に「山仁恵道世、桂林寺」とあるから、桂林寺は当時僧寺であったことになるが、両者は別寺とみた方がよいだろう。

建聖院（山城）

大島武好編の『山城名勝志』巻之二[28]に、建聖院について次のように記す。

○建聖院藤氏系圖云建聖院藤兼宣女景愛寺住持

藤氏系圖云時房萬里小路内大臣長禄元十一二十薨號ニ建聖院内大臣ニ

又云徹堂通公五辻建聖院住持比丘尼萬里小路権大納言嗣房卿女内府時房公妹也

ここで典拠となっている『藤氏系図』がいかなるものであるか不明だが、藤原（広橋）兼宣の女（法名真哲尼）が建聖院に入寺し、景愛寺住持も勤めていたことは『尊卑分脈』にも所見があり[29]、さらに同書によれば、真哲尼の兄兼郷の女子にも建聖院に入った者がいたことが知られる。『藤氏系図』の記事を信頼すれば、当寺は万里小路嗣房女が開基となり、成立は長禄元年（一四五七）以前ということになろう。

見性院（山城）

『蔭涼軒日録』[30]寛正五年（一四六四）四月十九日条によると、見性院に居住する比丘尼某が京兆尼五山の筆頭景愛寺の住持となっている。この寺については関係史料がほとんどないが、景愛寺の塔頭の一つとしてよいだろう。なお、上京区堀川町に現存する黒谷浄土宗の見性院は、碓井小三郎編『京都坊目誌』[31]に万治元年（一六五八）本誉の開基と記すように、別寺と考えられる。

光聚院

『親長卿記』[32]文明三年（一四七一）二月十一日条に、大慈院・光聚院・瑞華院がそれぞれ法華経一部の写経を進上したことが見えるが、大慈院と瑞華院が京兆尼五山の筆頭景愛寺（もしくはその名跡

を最もよく承けついだ宝鏡寺）に隣接した塔頭として存在していたらしい点からして、光聚院も同様の性格を持つ尼寺であったとみてよい。そのことは、例えば『尊卑分脈』[33]によると裏松重光の子女の一人に「女子（景愛寺住持光聚院）」とあるように、光聚院の比丘尼が景愛寺住持職を勤めていたことからも推察されよう。なお、『山城名勝志』巻之二[34]の光聚院の項に引く『長興宿禰記』に「文明八年（一四七六）十一月十三日今夜入江殿（御尼衆）光聚院御庵等同焼亡」と見え、当寺は応仁の乱の戦火で三時知恩寺などと共に焼失したことが知られる。

香台寺（大和）

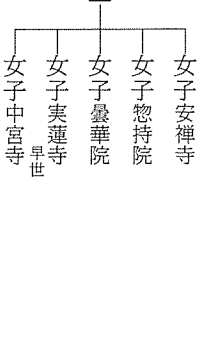
一条家関係の系図では、最も詳しくて正確なものとして知られる『摂家系図』を見ると、兼良の四女光智尼のところに「法花寺　香台寺殿」という注記がある。これは光智尼が法華寺に入寺した経歴を有しつつ、一方で香台寺の住持を勤めていたことを示している。この寺のことは、兄の尋尊が書き綴った『大乗院寺社雑事記』にもしばしば見えており[35]、大和国添上郡に所在した尼寺であったことがわかる。現在の奈良市池田町から今市町にかけて広がる広大寺池は、文治二年（一一八六）の大和国池田荘丸帳[36]には「香台寺ノ池」と記されているが、これを当寺に関わるものとすれば、創建は遅くとも鎌倉初期に遡ることになり、この点についてはなお検討の余地も残されていよう。池田荘は興福寺領で、かつて雑役免系の荘園として知られた。

慈雲院（山城）

『看聞御記』永享七年（一四三五）七月廿一日条には「慈雲院（景愛寺住）燈爐一（富士）遣」という、伏見宮貞成親王が慈雲院に燈爐を贈ったことを示す記事があるが、ここで「景愛寺住」と記さるているのは、当時慈雲院の比丘尼某が景愛寺住持を勤めていたことを示している[37]。この寺についても他に関係史料はほとんどないのだが、やはり景愛寺の塔頭の一つであろうか。

実蓮寺

『尊卑分脈』によると、伏見宮貞敦親王の女子の一人が実連寺へ入寺していたことが知られる[38]（略系図参照）。従って、ここに見える安禅寺・惣持院・曇華院・中宮寺と同様に、実蓮寺は尼寺と考えてよいだろう。所在地は畿内であろうが、今のところ他の史料に所見がなく、国名については不詳とするほかない。



寂光院（山城）

京都市左京区大原草生町に現存する尼寺。現在は天台宗。成立は平安時代に遡り、付近の来迎院や勝林院などと共に念仏別所として発展したらしいが、当時から尼が居住していたかどうかははっきりしない。文治元年（一一八五）建礼門院がここに隠棲したことは有

名で、この点から一応中世の尼寺に含めてよいと思われるが、『平家物語』灌頂巻[39]には「寂光院のかたはらに方丈なる御庵室をむすんで」とあるので、ややうがった見方をすれば、寂光院そのものを尼寺としてよいかどうかについては、なお検討の余地もある。念仏の日々を送った女院の生活については『閑居の友』[40]にも記されているが、建久二年（一一九一）に没して以後の当寺の存在形態は、確かな史料を欠いていて不明である。

慶長八年（一六〇三）に淀殿によって再興されたことが、現在の本堂の額銘[41]から知られる。天和二年（一六八二）に当寺を訪れた黒川道祐は、その紀行文『北肉魚山行記』[42]で「今比丘尼住職ヲ勤ム……専ラ天台宗ナリ……中世（ママ）、近江守山西郷氏ノ女子、尼ト為リ住職ヲ勤ショリ以来、今ニ于リ其ノ一家ノ内ヨリ尼公ノ弟子トナリテ代々之ヲ勤トナリ」と記しており、近世初頭に再興されて以後は、近江守山の西郷氏一族の女性が代々入寺することになっていたらしい。

十真院

大乗院尋尊が修訂筆写したものとされる『摂家系図』によると、妹の一人に「女子（十真院尊好）」なる女性がいた。すなわち、一条兼良の九女尊好尼が十真院に入寺していたことを示している。この寺については他に徴すべき史料がなく、詳しいことは不明であるが、尊好尼は後年、兼良の正妻東御方の菩提寺であった美濃小林寺の坊主をしていたことが、『大乗院寺社雑事記』延徳三年（一四九一）十一月十八日条によって知られる。この点については小林寺の項を参照。

十地院（山城）

『看聞御記』応永廿五年（一四一八）十二月廿六日条に「姫宮（七歳、葆光院第一宮）十地殿（號鳴瀧、萩原殿宮）有ニ御入室一、堅固内々儀也」とある。姫宮とは葆光院、つまり貞成王（のち親王）の兄である故治仁王の長女で、この日、十地院に入室したことを示している。横井清『看聞御記―「王者」と「衆庶」のはざまにて―』（前出）によると、彼女は上臈局の所生で、のち法名を智観と言った。「鳴瀧殿御喝食」とも呼ばれているので、十地院は禅宗の尼寺であったとみてよい。所在地の手がかりとなる「鳴瀧」は、現在の京都市右京区鳴滝であろうか。

浄住寺（加賀）

『洞谷記』[43]に引く元享三年（一三二三）十月九日付の瑩山紹瑾山僧遺跡寺々置文記に、次の一条がある。

一、加州浄住寺者、本願素意、清浄寄進之僧所閒、任ニ素意一、爲ニ了閑上座一、令ニ修練勤行一、如レ今無涯老門徒相承、而可レ令ニ住持興行一、是本願、并開闢慧（ママ）観大姉、并紹瑾、加州第二之遺跡也、素意勿レ令レ失。

すなわち、浄住寺は現在弟子の無涯禅師が相承しているが、もともと開山は瑩山の生母懐観尼であったというのである。この寺については不明な点が多いのだが、教団の編纂にかかる『曹洞宗尼僧史』も右の記事に拠ったらしく、懐観大姉が「加賀山崎村の浄住寺にあって、多くの尼僧達と一緒に修行にいそしんだ」と叙述している。[44]一応、創建当初は尼寺であったとしてよいだろう。『日本洞上聯燈録』所収の無涯智洪禅師の伝[45]には、元亨三年（一三二三）二月のこ

ととして「山以ㇾ師補㆓浄住席㆒付ㇾ衣」とあって、彼が当寺の住持に任命された日付を伝えており、僧寺化の下限はこの時に求められる。なお、懐観尼の居住した寺としては、もう一つ加賀宝応寺があったが（前稿参照）、前掲の置文によると、こちらは姪にあたる明照尼によって房主職が継承されていた。

小林寺（美濃）

かつて美濃国に所在した、一条兼良の正妻東御方（小林寺殿）の菩提寺である。一条家と美濃国との関わりは、兼良の六女了高尼が院主を勤めていた山城梅津是心院の寺領の一つに、市橋荘（厚見郡のうち。現在の岐阜市内）があったことに始まる。『桃花薬葉』[46]によれば、この荘園はもともと二条良基からその息女が入室した是心院に譲られたものであったが、兼良の息が院主職を相承したことによって、一条家の所領同然と化した。そのため、応仁の乱勃発以後は院主了高尼をはじめ、実母の東御方や兄弟で当荘に疎開する者が多かったが、兼良も文明五年（一四七三）五月に、守護代斎藤妙椿を頼って美濃に下向したことが『ふじ河の記』[47]から知られる。東御方が死去したのはこの年十一月十八日のことで、その葬儀の模様が『大乗院寺社雑事記』同廿一日条に「於㆓小林寺㆒御葬礼、瑞龍寺長老・梅寺衆僧等参入云々、梅津殿御大儀也……」と記されている。すなわち、葬礼は小林寺で挙行され、それを取り仕切ったのは了高尼であった。これによって、小林寺が当時すでに存在していたことが知られ、東御方が小林寺殿と諡されたのもこのことに因むのであるが、当初から尼寺であったかどうかまでは判然としない。しかし、『大乗院寺社雑事記』延徳三年（一四九一）十一月十八日条の十九年忌の記事には、

小林寺ハ三乃國ニ在ㇾ之、當坊主者予妹也、是心院殿御妹也、則弟子分也、先年於㆓成就院㆒爲㆓予戒師㆒、法名尊好、小林寺殿御入滅者巳歳也、當年十九年也。

と見えるように、この時までには兼良の九女尊好尼が坊主を勤める尼寺となっていた。これ以後の沿革は不明で、今日法燈を継ぐ寺もなく、寺跡も全く不明であるのは遺憾とすべきである。

深修庵（山城）

応永二十六年（一四一九）六月に起った朝鮮水軍の対馬入寇、いわゆる応永の外寇後、国交修復のため朝鮮国王の派遣した宋希璟の紀行詩集『老松堂日本行録』[48]に見える尼寺。当庵は以前にも朝鮮使節らの宿所になったことがあるらしいが、この時も居住していた尼を他へ移して、回礼使一向の旅宿に充てられている。同書には喝食に関する記述もあるので、禅刹であったことが知られ、当時の尼寺の機能を知る上で興味深い一例と言える。今のところ、他の史料には所見がない。

（以下、次号に続く）

（平成二年四月十六日　受理）